

郷土室だより

第103号

平成11年3月25日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 10-057

「続」中央区の「橋」

(その3)

◇架橋八八周年

今年(平成十一年)四月三日は、明治四十四年(一九一一年)のこの日に、現在の日本橋が出来上がってから八十八年目だということで、盛大に記念行事が行われます。

東京のまん中にある橋として有名な日本橋は、その名の通り、日本における経済活動の中心だということに加えて、かつてはこの橋の上に日本の道路元標が設けられて、主要都市間の距離(里程)の基準になっていたことは良く知られていることです。

これは日本橋が、江戸という都市の経済活動の中心地だったため、道路元標(今は北東詰に移されている)もここに立てられたのだともいえます。

◇二つの日本橋

江戸の中心のニホン橋に対して、江戸時代には「天下の台所」と呼ばれた大坂にもニッポン橋があります。日本にはニホンとニッポンの違いがあることと、そのいわれや、原因などに踏み込むことはここでは

「堀川」に架かった日本橋

東京地質図(『東京地盤図』附図の略図)



凡例 □日本橋台地 □入江・低湿地 □水路・堀 □本郷台地

略しますが、「台所」といわれたくらいですから、大坂は名実共に江戸時代の日本の経済の中心地でした。

その大坂のニッポン橋は現在の地名でいえば大阪市南区を東西に「流れる」、運河の道頓堀川に架けられています。

この橋を通る道は堺筋と呼ばれる大阪市街を南北に通る幹線道路です。橋の北側は長堀橋筋、南側は道頓堀一丁目を経て日本橋一、五丁目と続きます。

面白いことに、江戸時代には二ホン橋と同じ様に、ニッポン橋にも南詰に高札場があり、二ホン橋の方は今の野村証券ビルの前に晒し場があったのですが、大坂では橋の上が晒し場に使われました。この様な「公」的な施設が共通してあったということは、二ホン橋もニッポン橋も都市行政の上では同じような役割を果たしていたことを物語るものでした。

また二ホン橋は五街道の起点と、舟運の中心でしたが、ニッポン橋の方も讃岐(香川)の金比羅参詣船の発着所があるという、水陸の交通上の要所でした。

◇『慶長見聞集』の日本橋

この二ホン橋ができた当時の状況は、幕府を初めとする公的な機関による記録には見られません。

しかし、ほぼ同時代の著作だと考えられる『慶長見聞集』(三浦浄心著 全一〇巻五冊 慶長一九年一六一四年成立とされる)が現在のところ唯一つに近い文献として知られています。

そのため、日本橋に関する書物には必ずと言って良いほど、この本の記事が引用されています。

しかしこの書物の内容は当時の社会事情から言えば当然のことなのですが、一口にいえば「徳川体制」を賛美するものといえます。

それだからこそ現在まで伝えられてきたわけで、明らかに前後に矛盾があったり、事実ではない部分もあります。ここではそれを承知で、引用をすることにします。

まず、順序として、この書物の巻之五の最初に出てくる「日本橋市をなす事」の項を原文のまま紹介することにします。

「見しは今、江戸町東西南北に堀川ありて橋も多し。其数をしらず。

扱又、御城大手の堀を流れて落る大河一筋有。此川、町中を流れて南の海へ落る。此川に日本橋只一すじ懸る。是は往復の橋なり。町中行かひの人此橋をつに集て往来をせり。(中略)

日本橋を見渡せば、よるとなくひるとなく人の立並びたるは、只是市のさかんに立たるがごとく、人馬の足音雷のごとし。(中略) 件(二)の日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町割の時分、新規に出来たり。その後此橋御再興は元和四年戊午の年なり。大川なればとて川中へ

西方より石垣をつき出しかけ給ふ。敷板のうへ三拾七間四尺五寸、広さ四間式尺五寸なり。此橋に於ては昼夜二六時中諸人群をなし、くびすをついで往還たゆることなし。」

注 三浦浄心(永禄八年生)正保元年没(一五六五)一六四四)北条氏の家臣、北条滅亡後、江戸で商人となり、また仮名草子作家・随筆家でもあった。

著書に慶長見聞集・見聞軍抄(ともに慶長一九年刊)、巡礼物語、そゝる物語・北条五代記(ともに寛永一八年刊)などがある。

『国史大辞典』によると浅草寺淡島堂前に浄心の寄進した石造手水鉢が現存するとある。また上野桜木の凌雲院に墓があるという。

◇要約と問題点

これを要約すると、①橋ができしたのは慶長八年(一六〇三)。②大手の堀を流れる大河に架橋。③町人が自由に渡れる、唯一の町の中に架かった橋。④それゆえ昼夜の区別無く大勢の人が往来する。⑤元和四年(一六一八)に再興し寸法的にも明確な橋ができた。ということになるでしょう。

また、同時代の資料ではない『武江年表』(斎藤月岑著 幕末)「明治に掛けて成立」には、

「この橋御普請の時分、日本国の人あつまりて掛けたる橋なり。此橋の名を人間はかつて以て名付ず。天よりや降けん、地よりや出けん、諸人一同に日本橋とよひぬる事希代不思議と沙汰せりと云々」

この記事の書き方は意味深長です。日本国中の人が架けたため、人為的な命名ではなく自然発生的

に「日本橋」になったというものです。

◇橋はいつ架けられたか

前にも触れたように、公式な記録がないため(なぜ公記録がないのかという大疑問は別にして)、日本橋が最初に架けられた時期を巡って江戸時代からいろいろな異論が交わされてきました。

① 代表的なのが慶長八年説で、その根拠は前出の『慶長見聞集』と『武江年表』の記事です。

さらに『慶長見聞集』には、慶長九年二月四日に幕府が日本橋を起点に、諸国に一里塚を築かせる事を命令していることに関連して「当君の御時代に、一里塚をつくべきよし仰出されたり。されば日本橋は慶長八癸卯年江戸町わりの時節新敷出来たる橋なり」と八年説を繰り返しています。

② 次に慶長十一年十二月八日以前には存在していたとする説があります。それは『江戸名所図会』(斎藤月岑等編 天保九年一八三八年刊)の中で、日本橋について『事跡合考』という書物を引用

して、「日本橋のかかりしは慶長十七年の後かとありて、其考へを記せり。されど北条五代記、永楽銭禁制の事を記せし条下に、慶長十一年のとし極月(十二月のこと)八日、武州江戸日本橋に高札を建るとある時は、慶長十七年より以前なりとするべし」と幕府の公文書を参考にした意見を述べています。

これを整理しますと、『事跡合考』説は最初の架橋を「慶長十七年以後」とします。

しかし参考意見として前に取り上げた『慶長見聞集』と同じ著者が書いた『北条五代記』の「永楽銭禁制」の記事から、或いは「慶長十一年以前」にはあったのではないか、という意見です。

③ もう一つは『落穂集追加』(大道寺友山著 享保十二年一七二七、成立)という書物の中の、「浅井一周斎云、尼ヶ崎庄辺の古き土人申伝へていふ、日本橋はしめて掛り候節、尾張殿紀州殿御若年ながら御兩人ともに彼普請場へ御出被遊候。各革の御立附を被着しと云々、右のせつともを考見候得は、日本橋かかり候は、慶長十

七年後か、いかんとなれば大坂夏御陣は元和元年(一六一五)御兩人その御歳十六と十五なり、是を以て知るべし」という事実から架橋は慶長十七年後だとするものです。この記事の意味は慶長十六年から始まった第二次天下普請(江戸城拡張工事)には、家康の子供も工事現場に向いたという話から始まります。

ここでいう尾張殿とは家康の九男の義直(慶長五年十月二十八日、伏見で生まれる)と、紀州殿は家康の十男の頼宜(慶長七年三月七日、伏見で生まれる。なお義直の異母弟のことです)。

仮に浅井一周斎が言った通りに、慶長十七年に日本橋の工事があって、義直と頼宜兄弟が皮ズボンをはいた姿で、工事現場にいったとすると、義直十二歳、頼宜十歳の時のことです。この二人の子供が橋普請を見物にいったという事柄から日本橋誕生の時期を決定するというのは、幾らその子供らが將軍を隠居して大御所となった家康の子だからといっても、少し乱暴な話のようです。

◇慶長八年という年

次の月日や事柄について、いちいち資料を挙げて紹介する事は省略するほかはないのですが、この年の二月十二日に、家康は天皇から征夷大將軍に補任されています。実力第一人者が武家の棟梁として最高の官位と権限を得たわけです。

翌三月二十一日に家康は上京して二条城に入り、將軍就任の諸行事を片付けて、七月十五日に伏見に帰っています。

さらにその月の二十八日には孫の千姫を大坂城の豊臣秀頼の所に興入れさせました。

そして十月十八日に伏見を出発して、次男の秀忠が留守をする江戸に向かいました。

この時点で、家康と秀忠はやっと江戸幕府の体裁を整える時間的な余裕ができたとしても、余り無理な見方ではないでしょう。

家康が秀吉の命令で江戸を本拠に定めたのが四九歳の時でした。そして七五歳で没するまでの足掛け二十七年間に江戸城にいた期間は、延べにしてわずかず四年前後しかあ

りません。

このときの家康の江戸城住まいも、慶長八年の年末から翌年二月一杯までの約四か月間で、早々とまた活動の中心地の伏見城に戻っています。

こうした状況では幕府ができたとはいえ、必ずしもその途端に全国の人々が江戸に集中を始めたとは、いえなかったのが実情だったと考えられます。

◇堀川の意味

前出の「日本橋 市をなす事」に戻りますが、その中に「江戸町東西南北に堀川ありて橋も多し」という箇所と、「御城大手の堀を流れて落る大河一筋有」という自然河川を意味する表現があります。「堀川」とは文字通り堀を掘って水を通した運河のことです。それに対して本来の川は「流れ落ちる大河」とはっきり区別を付けています。

ほかならぬ日本橋はこの大河に「只一すじ懸かる」橋と書かれています(しかし実際は「堀川」でした。表紙の図を参照のこと)。

これを例えば『国史大辞典』の「日本橋」の項で見ますと、「平川河口が延長され、平川上に架された」橋だという不思議な表現があります。本当はこの辞典の「日本橋」の項を全部紹介して指摘しなければならぬことなのですが、とにかくそう書いてあります。

本題に戻ると、この『慶長見聞集』には「御城大手の堀を流れて落る大河一筋有」の川筋の下流に日本橋が架けられた事とやらんでその上流の様子も巻之四の「江戸川橋にいわれ有事」という項で取り上げています。

この記事は日本橋には触れていないのですが、本来の川と「堀川」の関係を知る手掛かりになりますので、橋の形式の問題とも関連させて、次号で改めて紹介することにします。

◇真相が分かる資料

約四百年前に自然河川の河口が「延長」できるのか、またそれを誰がどの様に延長したのか、疑問を持ち始めると際限なくそれが膨らんで行きます。

これは、ちょうど約三十年前、有名な大学教授が日本橋の橋名の説明に、「二本の丸太を渡した」橋だから付けられた名だという説をその著書に書いて、それなりに定着してしまったことを思い出させる解説です。

東京都心にある水路はこのシリーズの(一)(一〇一号)の中の「臨海都市「江戸」とそれに続く「江戸の水路の特徴」の二つの項で説明したように、なかなか複雑です。

しかし少なくとも戦災復興事業が始められるまで存在した水路について、どの部分が自然河川の部分、どこからが人工河川、つまり「堀川」なのかを判定する資料は、きちんと揃っていたのです。

その一つが『東京及横浜地質調査報告』およびその『附図一六枚』(内務省復興局建築部編 昭和五年刊)です。これは大正二二

年の関東大震災の復興事業の基礎資料として作られた地質図です。
二つ目は『東京地下鉄道史』乾
・坤(東京地下鉄道株式会社 昭和九年刊)と『東京地下鉄道丸ノ内線建設史』(帝都高速度交通営

団 昭和三五年刊)。

三つ目が復興局の地質調査の戦後版ともいえる『東京地盤図』(東京地盤調査研究会編 昭和三四年刊)などです。いずれもカラー版を豊富に使用した形で発行されています。

表紙の「堀川に架かった日本橋」図は『東京地盤図』から作った略図です。この『郷土室だより』にカラーが使えないので、やむをえずこのような略図にしました。

これらの資料は京橋図書館にありますし、また同館が発行した『中央区沿革図集』『日本橋編』にもそれぞれが掲載されています。それにしても、こうした自然科学的な分野の調査の報告書や、実際の工事で得られた多くの事実を纏めた報告書などは、考古学的な調査結果と同じ様に、歴史の記述に漏れなく取り入れられなければならないものと考えます。

「二本の丸太橋」といった語呂合わせや、「河口が延長」といった超自然的な表現は多くの人を惑わせるものといって良いでしょう。

(次号に続く)

(鈴木理生)